

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：82805

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2020

課題番号：20K21952

研究課題名（和文）日本における非配偶者間人工授精の実施状況に関する歴史研究

研究課題名（英文）A Historical Study on the implementation of Artificial Insemination by Donor in Japan

研究代表者

由井 秀樹 (Hideki, Yui)

公益財団法人医療科学研究所・研究員育成委員会・研究員

研究者番号：40734984

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本における非配偶者間人工授精（AID）の過去の実施状況を検討した。AIDは、1948年にはじめられたことはよく知られているが、今日に至るまで、少なくとも60施設以上が実施経験があったことが明らかになった。医師たちはこの処置を擁護するため、子へのフォローアップ調査を行っていた。本研究ではフォローアップ調査を分析し、子の「優秀さ」のエビデンスとしてこうした調査が使用されたことを示した。また、本研究では誰がどのように提供者役割を担っていたか検討した。医学生が提供者の中心を担ってきたこと自体はよく知られているが、彼らは積極的に提供に応じたわけではなかったことなどが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の主な意義は、第一に、AID及びフォローアップ調査が積極的優生学の意図をもって実施されてきたことを示したことで、障害者への強制断種など、消極的優生学としての側面を中心に論じてきた日本の優生学史研究に補助線を引いたことである。第二に、医学生たちが積極的に提供に応じたわけではないことを示し、生殖補助技術の法規制をめぐる議論に提供者保護の視点を組み込むことが重要であることを示唆した点である。

研究成果の概要（英文）：This study examined the past practice of artificial insemination by donor (AID) in Japan. It is well known that AID was started in 1948, but to date, at least 60 facilities have been found to have performed the procedure.

Medical doctors were conducting follow-up surveys of the children to defend the procedure. This study analyzed the follow-up surveys and showed that these surveys were used as evidence of the child's "superiority."

This study also examined who and how the sperm donor role was played in the case of AID. It is well known that medical students have been the main donors, but they were not actively involved in the donation process.

研究分野：科学史、生命倫理

キーワード：非配偶者間人工授精 フォローアップ調査 提供者保護

1. 研究開始当初の背景

日本で提供精液を用いる人工授精(非配偶者間人工授精;Artificial Insemination by Donor [AID])は1948年に慶應義塾大学病院ではじめられ、その後も、同病院を中心に実施されてきた。2000年代に入り、国内でもAIDによって出生した方が声をあげはじめ、匿名の提供者が用いられてきたことに伴う出自を知る権利の問題が提起されるとともに、この処置が開始された経緯や実施状況の歴史にも注目が集まったが、詳細な研究がされてこない状況が続いた。また、慶應義塾大学病院が2018年に新規のAID患者の受け入れを停止したこともあり、今日、AIDの歴史を総括すべき時代状況にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、AIDの日本の歴史を広範かつ詳細に描くことである。本研究では、「終戦間もなくの段階から、日本産科婦人科学会が実施施設一覧を公表する1990年代まで、AIDは日本全国でどのように実践されてきたのか」という核心をなす「問い」のもと、AIDが、どのような医療施設で、どのような方針のもとで実施され、語られてきたのか検討するとともに、慶應義塾大学の産婦人科学教室が1960年代から70年代にかけて実施してきた、AIDで出生した子どもに対するフォローアップ調査を分析した。

3. 研究の方法

『日本不妊学会雑誌』など不妊医療関連学会のジャーナル、『産科と婦人科』など産婦人科医向け雑誌、『飯塚理八教授の不妊の治療』(飯塚理八著、主婦の友社、1983年)など不妊患者向け書籍などの資料の分析に加え、AID実施施設と関係する/していた産婦人科医への聞き取りを行った。

4. 研究成果

研究目的 について。

AIDの施設施設として著名な慶應義塾大学病院以外にも、今日に至るまで、少なくとも60施設以上が実施経験があったことが本研究により明らかになった。

実践状況として、精子提供者に注目すると、多くの施設で医学生や若手の医師などが提供者役割担っており、医学生たちが積極的に提供を担ってきたわけではなかったこと、それ故に、多くの医療施設が提供者の確保に苦勞していたことなどが示された。

医学生が積極的に提供していたわけではなかったこと背景として、大学病院の教員たる医学者と医学生との間の力関係を考慮する必要がある。したがって、提供者保護という観点からすれば、少なくとも力関係がなく自由意思に基づく提供が可能な男性を提供者とすべきことが示唆される。現在進められている生殖補助技術の法制度づくりをめぐる議論では、出自を知る権利という観点から子どもの保護が中心的に論じられているが、子どもの出自を知る権利を保証した上で(=提供者の身元情報を開示すること前提で)提供者保護も同時に考慮する必要があることが本研究から示唆される。

研究目的 について。

AIDが導入されて間もない1940年代終盤の段階で、積極的優生学の実践として人工授精技術を用いた人種改良論の構想が語られることはあったが、こうした構想は賛否が分かっていた一方で、戦後復興を目指す目的もあって優生政策が強化されていた時代状況も相まって、消極的優生学は広く支持されていた。

人種改良論とは別の文脈で、AIDは提供精子を使うという理由で、戦後まもなくの導入時から賛否が分かれるものであった。それ故、医師たちはこの処置を擁護しなければならなかった。そのためにとられた方法の一つが子へのフォローアップ調査であった。

こうした調査は他国でも行われていたが、日本が世界に先駆けて実施していたようである。IQや健康状態などをチェックする目的での子どものフォローアップ自体は、当初から行われていたが、研究成果として報告されるには至らなかった。

研究成果として報告されるに至るような調査は1960年代と70年代に実施され、技術の安全性を確かめる目的で子の健康状態も調べられていた。しかし、その延長線上で、子どもの知能指数の高さが示され、AIDは「優秀な」子どもを生み出す方法として語られた。そして、「優秀な」子どものエビデンスとして、フォローアップ調査は医師たちによって一般女性向け雑誌を含む、様々な媒体で言及されていた。

安全性の追求は医学研究としては合理的ではあるが、生殖補助技術の文脈に即すれば、障害児の出生防止という発想に直結してしまう。1980年代以降、障害者運動などの要因により、優生学的な発想が否定的に捉えられていき、次第にAIDで出生した子の「優秀さ」は次第に語られなくなっていく。その一方で、技術の安全性の追求は続いていた。一方で、言い換えれば、積極

的優生学的な発想が生殖補助技術と切り離される一方、消極的優生学的な発想は依然として結びついていることが示された。

以上の点は、「エビデンス」に基づいた積極的優生学の発想に基づく実践が極めて小規模ながらも実践されてきたことを示しており、障害者への強制断種などの消極的優生学を中心に論じてきた日本の優生学史研究に補助線を引くものといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Hideki Yui
2. 発表標題 The History of Japanese Follow-up Surveys of Children Conceived by Artificial Insemination by Donor (AID)
3. 学会等名 European Association for the Study of Science and Technology/ Society for Social Studies of Science 2020 Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hideki Yui
2. 発表標題 A Study of Donor Protection in Donor Conception: The History of Sperm Donation in Japan
3. 学会等名 Joint Atlantic Seminar in East Asian Science, Technology, and Medicine 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------